

架け橋になるとは

—インドネシア人元留学生の活動—

Becoming a Bridge:

Activities of Indonesian Alumni in Japan

PT. JMAX Indonesia 取締役会長 フィデンス フェリクス シマンジュンタック

東京工業大学国際開発工学専攻特任講師 ファリド トリアワン

ダイハツ工業株式会社海外カスタマーサービス部社員 アブディ プラタマ

Fidens Felix SIMANJUNTAK (President Commissioner, PT. JMAX Indonesia)

Farid TRIAWAN (Lecturer, International Development Engineering Department,

Tokyo Institute of Technology)

Abdi PRATAMA (Overseas Customer Service Division, Daihatsu Motor Co., Ltd.)

キーワード：架け橋、働く文化、ものづくり五輪、母国への貢献、フォローアップ

1. はじめに

日本で頑張って勉強している多くの留学生は、日本語のスピーチ大会や人の前で自分の夢を語る機会があると、必ずと言っていいほど、「将来はいつか日本と母国との架け橋になりたい」と言い、まるでパターン化されたかのような語り口となる。しかし、この「夢」を実現した人は、果たして、どれぐらいいるだろうか。

この記事ではその「夢」、つまり架け橋になることを（それなりに）具現化している、私たちインドネシア人元留学生の活動を紹介したい。私たちの活動が他国の留学生の参考・刺激になること、また、留学生が持つ潜在力について、日本の読者の方々にとって参考になれば、幸いである。

2. 夢の実現

2012年9月1日に、ENJINIA NUSANTARA（エンジニア・ヌサンタラ：エンジニアは「技術者」の意味で、ヌサンタラはインドネシア語で「インドネシア列島」を意味する。以下略してEN）という組織が設立された。関東、関西、中部地域の、（当時ほぼ全員が）現役のエンジニアとして日本企業で勤め

ているインドネシア人元留学生が、浜松に集まり、設立を宣言した。ENのメンバーは「自立精神」を胸に抱き、日本で学んだ知識や技術、そして実務経験を活かして、「自立した工業国であるインドネシア」の実現に向けた具体的な社会貢献活動を考え、行動に移す決心をした。当時のメンバーは右の写真の通り。



エンジニア・ヌサンタラ創立時の集合写真

ENが提唱した「自立した工業国」とは、開発からアフターサービスの工程まで、良質な製品を生み出す力を持つ国を意味する。インドネシアの大きな資源と人材の潜在力を引き出すために、「自立性」というキーワードが重要になってくると考えている。このビジョンの実現に向けてENは様々な提言かつ具体的な活動を積極的に実施している。

3. 本の執筆

活動の「具体性」を行動原理としているENが最初に選んだのは本の執筆だった。限られたメンバー数と活動に投入できる時間、そして各自が離れた場所にいることによる制約があっても、本の執筆なら成し遂げられると考えた。

インターネットを通じて情報を発信することもできるが、本は物理的に（本棚などで）長期間に渡り残るストック型の情報だ。何度も読返すことができる優れたもの。さらに、店頭に並ぶため、インターネットにアクセスできない読者にもリーチできる。

第一弾の本として選んだテーマは、ENメンバーが実際に日々体験している日本人の働き方（正確に言えば、それなりに大きな規模の日本企業にいる日本人の働き方と言った方が良いかもしれない）。日本ブランドを通じて、日本の高い技術と品質がインドネシアで知られているため、それを支える日本人の働き方について、多くのインドネシア人が興味を持つであろうと考えた。

この本を通じて、ENメンバーそれぞれが勤める企業で経験した日本の働く文化を、読者に疑似体験してもらいたい、豊かな国は強い産業に支えられ、強い産業の土台には、優れた「働く文化」が存在するという事実を多くのインドネシア人に理解してもらいたい、という思いがあった。インドネシアでの本の発売広告を次頁に示す。

この本には、日本の良い面だけでなく、良くない面もバランス良く盛り込んでいる。日本社会のありのままを見て欲しいという狙いがある。また、奇跡的な発展を遂げた日本は、決して雲の上のものではなく、地味かつ泥臭い、人間らしい物語である事を理解してもらいたい、そして、インドネシア

人も本気で変われば、国が発展できるという「根拠のある自信」を読者に抱いて欲しいと考えた。

日本人の働き方に関する本は、実は珍しくない。例えば、日本を代表するトヨタに関する翻訳本は、数タイトルはインドネシアの本屋に置いてある。しかし、実際にその企業で働いたインドネシア人が書いた本は、私たちのものが恐らく初めての本だった。そして他と違い、物事を体系化しようとするのではなく、日本企業で働くことの実態について生々しく述べ、日本とインドネシア、両国の文化の中で生きているからこそ、書き下ろせる内容になっている。

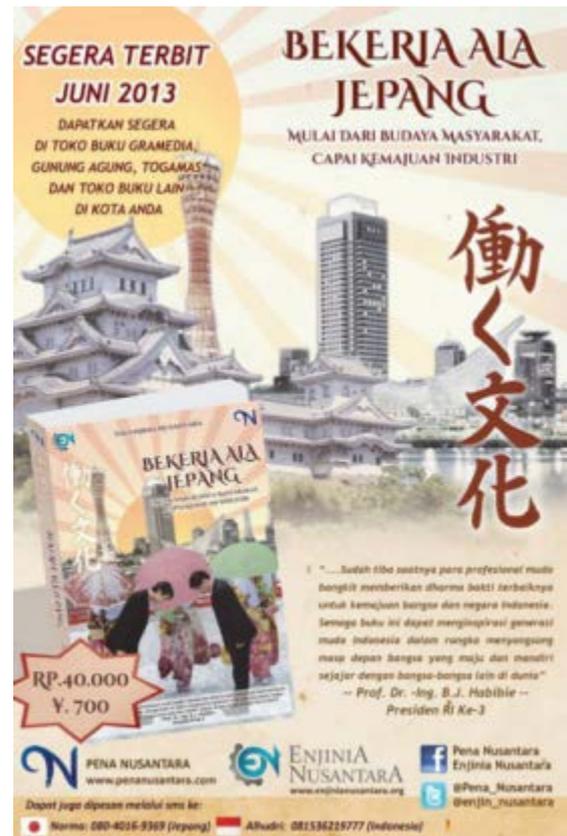
ここで本の内容と、その内容を選んだ背景について少し紹介したい。

まず第一章の「社会人」について取り上げる。日本で当たり前に使われる「社会人=社会に参加し、その中で自身の役割を担い生きる人」という言葉は、インドネシアには対比できるものがない。この事実を非常に面白く感じた。なぜなら、示す言葉がないというのは、日常会話に出てこず、社会全体の意識が低いという意味だからだ。

インドネシアの法律で「大人」として認められる年齢は17歳からだが、実態は高校1、2年に在籍する未熟な「青年」だ。成人式もないので、「責任のある大人」へのはっきりとした節目（儀式）はないと言える。インドネシア人は緊張感もなく何となく「大人」になった、いつの間になかった、という気持ちで社会に出ていく訳だ。

このようにインドネシアでは、社会に対する自分の役割や貢献というものを深く考える機会が少ないので、残念ながら、きちんとしない「大人」が沢山いる訳だ。だからこそ、この章はとても重要で、読者に伝えたい本のエッセンスと言っても過言ではない。つまり、働く文化というのは、何のために働くのか、という自問自答から始まっている。

次に「終身雇用」というテーマについて紹介したい。私たちから見れば、終身雇用制度は日本の高度成長期の鍵を握っていた。一生の安泰が約束された中、当時の日本人が仕事に人生を尽くした。その姿は、短期間で転職を繰り返しているインドネシア人と相反している。このままでは強い組織が作れない。人口ボーナスの時期にあるインドネシアは、(特に企業は)日本の終身雇用制度から学べるところがあると考え、テーマの一つとして選んだ。



EN がリリースした本

「日本企業での働く文化」の発売広告

もちろん、現在は終身雇用の神話が崩れているという事実についても述べている。パナソニックや日立などの終身雇用の象徴である大企業によるリストラや、「窓際社員」という終身雇用がもたらす課題についても、読者に理解してもらう必要があると考えた。

最後に「異文化」という章を紹介したい。この章では宗教観について触れている。周知の通り、インドネシアの国民の8割以上がイスラム教徒で、残る2割の人口もほとんどが一神教の信者である。住民票には「宗教」という欄があり、自分の宗教を登録しなければならない。このような環境で育ったインドネシア人は、第二次世界大戦後、宗教と政治を完全に分離した日本社会に対して、大きなギャップを感じずにいられない。

特に、1日に5回お祈りの義務のあるイスラム教徒にとって、祈る時間と場所の確保は常に直面する課題である。会社勤務になると、就業時間内にお祈りの時間を確保しないといけないので、どうしたら良いか、戸惑う人が多い。また、日本人にとって当たり前の「飲みニケーション」や温泉などでの「裸の付き合い」は、イスラムの価値観と真逆なので、どう断れば失礼に当たらないか、悩む人が多い。

この章を通じて、読者には日本との文化の違いを認識してもらいたい、違いを認識しつつ、良いところをマネして欲しいと思う。将来日本人と一緒に仕事をする機会がある人には、この本を参考にし、スムーズに人間関係が築けるように願っている。

ENがリリースした本の出版費用は全て自己負担、資金はENメンバーが出し合ったお金からだった。Gotong Royong(ゴトン・ロヨン、相互協力)の精神はインドネシアで深く根付いているためか、ごく自然に、全員この方向性に賛成した。

元インドネシア大統領で、インドネシアの技術発展推進の第一人者であるハビビ氏より、本への賛同の言葉をいただき(右にハビビ元大統領と関係者の写真を示す)、めでたく2013年6月に本が発売され、今日までに1000冊以上が売れた。この類の本にしては、ベストセラーのカテゴリに入るらしい。

投じた資金を回収し、少額ながらも、次の活動原資として使える利益も出た。今はものづくりに焦点を当てる第二弾の本の出版を準備中で、本の執筆はENの中心活動の一部になりつつある。



ハビビ元インドネシア大統領(右から3人目)より、本への賛同の言葉をいただいた時の写真

4. ものづくり五輪の開催

ENのその他の主要活動は、技術革新製品の発明大会である。対外的には「OLIMPIADE MONOZUKURI INDONESIA（ものづくり五輪）」という名称で発表した。この大会を通じて、ENは、インドネシア各地にある大学からの発明を募集し、ENメンバーからなる審査員の厳しい判定を経て優勝者を決める。ENの大きなビジョンは、この大会から、大企業に発展できるスタートアップの誕生だ。ものづくりを中心に、シリコンバレーのようなエコシステムを作ることを目指している。

大会では、コンセプト段階で応募を受付けた。「ホーム関連製品」、「エコ関連製品」及び「ITシステム」の3つのカテゴリに分けて、応募されたアイデアの審査を行った。

審査基準は、冒頭で述べたENのビジョンを踏まえた内容になっている。提案された技術革新のオリジナリティはもちろん、実際商品化された場合、どれだけインドネシアの国産部品を利用するのか（自立工業国実現への貢献度合いを測る）、インドネシア市場のニーズにどれだけマッチするか（国内経済への貢献度合い）、海外市場で売れる可能性はあるのか（輸出への貢献度合い）。

このような基準を通ったチームには、数カ月間に渡り、プロトタイプを実際に開発してもらった。具現化できるアイデアのみ、最終選考に残す考え方だ。机上空論のアイデアではなく、私たちは実用的なアイデアを求めた。

最終選考に残ったアイデアの例としては、「ナノ技術を利用した果物野菜の保存」、「ガス・電気などの複数エネルギー源を利用可能なコンロ」やITシステムカテゴリで優勝した「大型駐車場の管理システム」が挙げられる¹。

優勝チームには、商品開発のために充てる資金を賞として用意した。全額ENメンバーの「カンパ」と本の販売利益で賄う予定だったが、運良くこの活動が、インドネシア中小企業省の官僚の耳に入り、政府のプログラムとして実施し、政府予算の支援を得ることになった。1435チームの応募から、最終選考に残った10チームは、政府が用意する起業家育成研修プログラムに参加することができ、その中の（ものづくり五輪の優勝チームに加えて）条件を満たしたチームは、政府のインキュベーター施設に入居できるようになった。雪だるま式にこの活動が多くの人を巻き込み、大きくなった。この活動についてインドネシアにある日本語新聞「じゃかるた新聞」



「ものづくり五輪」の新聞記事

¹ <http://enjinianusantara.org/tag/monozokuri/>

の取材を受けた記事を右に示す。

5. 今後の活動

ENがやりたいこと、やらねばならないことは、まだまだ沢山ある。これからより大きな活動を実施するために、より大きな資金を扱う必要が出てくる可能性もある。大きな規模の活動をするのに、組織を法人化する必要があると考えているので、今はその準備を行っている最中だ。

インドネシアは2014年に政権交代があったものの、官僚はほぼ同じ体制になっているので、政府とのパイプを大事にしたい。ENは独立性を保ちつつ、政府と二輪三脚で、インドネシアが日本のような工業国として生まれ変わることができるように、これからも実績を一つ一つ着実に作っていく所存である。私たちにとって、冒頭に述べた日本とインドネシアの架け橋になるとは、この使命を果たすことであろう。